

東山遺跡第2次発掘調査



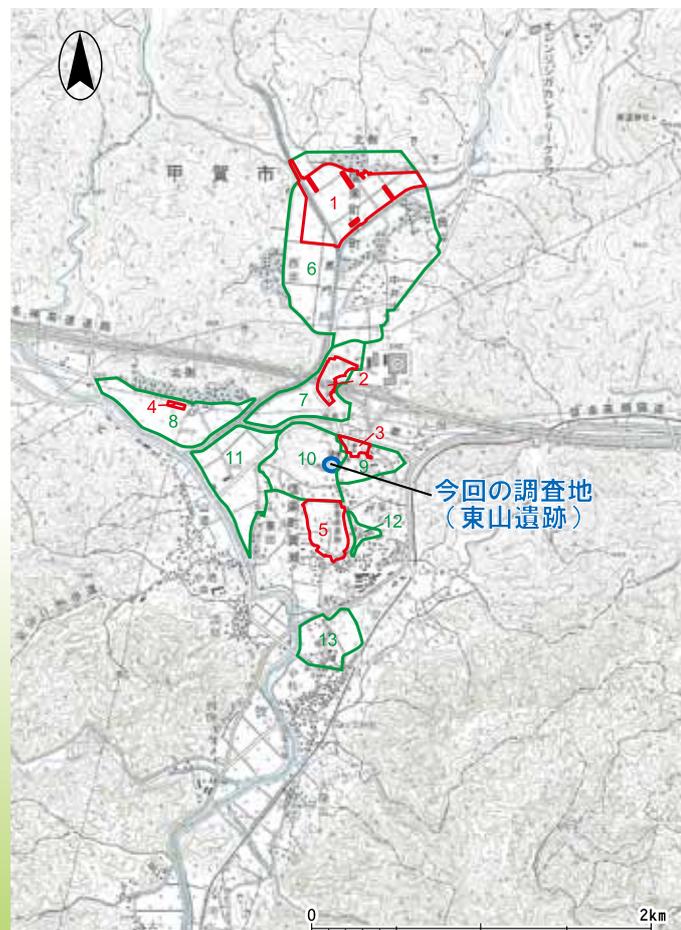
大型建物1（南から）

東山遺跡と紫香楽宮関連遺跡

ひがしやまいせき
東山遺跡は甲賀市信楽町の北部、きのせ
黄瀬地区に位置
します。遺跡の南約300mに甲賀寺と推定される史跡
しがらきのみやあとだいら
紫香楽宮跡内裏野地区（以下、寺院跡）、1.5km北には
紫香楽宮の中心区画が所在した史跡紫香楽宮跡宮町
みやまち
地区（以下、宮殿跡）があり、さらに東側には大規模官営
かじやしき
工場の史跡紫香楽宮跡鍛冶屋敷地区（以下、鑄銅所跡）、
ちゅうどうしょ
北側には紫香楽宮の道路遺構が確認された史跡紫香楽宮
しんぐうじんじゃ
跡新宮神社地区が隣接します。このように東山遺跡の周
辺には紫香楽宮に関連する遺跡が集中しています。



空から見た紫香楽宮跡



1～5 史跡紫香楽宮跡 (1 宮町地区 2 新宮神社地区 3 鍛冶屋敷地区 4 北黄瀬地区 5 内裏野地区) 6 宮町遺跡 7 新宮神社遺跡 8 北黄瀬遺跡 9 鍛冶屋敷遺跡 10 東山遺跡 11 東出遺跡 12 紫香楽宮東遺跡 13 雲井遺跡

図1 東山遺跡と紫香楽宮関連遺跡群

調査経緯

これまで東山遺跡で行われた発掘調査は、平成17年（2005年）に寺院跡の北側隣接地で一回実施しており、道路側溝と考えられる2本の並行する南北方向の溝が確認されています。この2本の溝は寺院跡の中軸線上に位置し、40尺（約12m）の間隔である上、新宮神社遺跡で見つかった道路側溝の延長線上にあたることから、宮殿跡と寺院跡を結ぶ道路の一部であると推定されました。

今回の調査地はこの道路推定線上に位置することから、道路遺構が見つかる可能性を考えて、試掘調査を実施しましたが、道路遺構は確認できず、これまで宮殿跡などで見つかっている紫香楽宮関連の主要遺構に匹敵する大型の柱掘方が確認されました。

そのため、遺構の性格や広がりを確認するために、調査トレンチを拡張し、東山遺跡第2次発掘調査として追加調査を実施することとしました。なお、調査面積は約670㎡です。

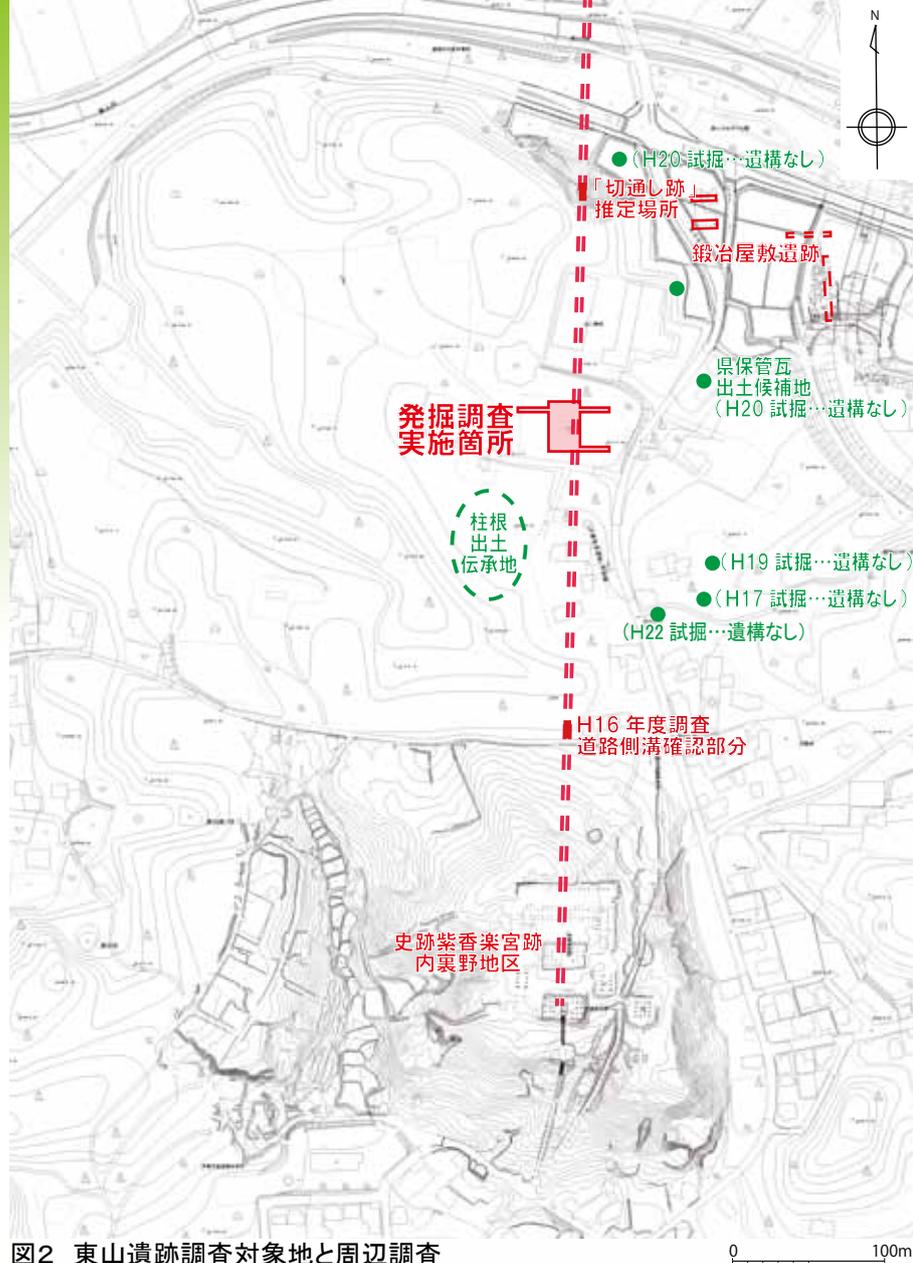


図2 東山遺跡調査対象地と周辺調査



大型建物1（北から）



柱痕跡が二つある柱掘方の断面



柱痕跡が二つある柱掘方



柱の断面（C列最北端）

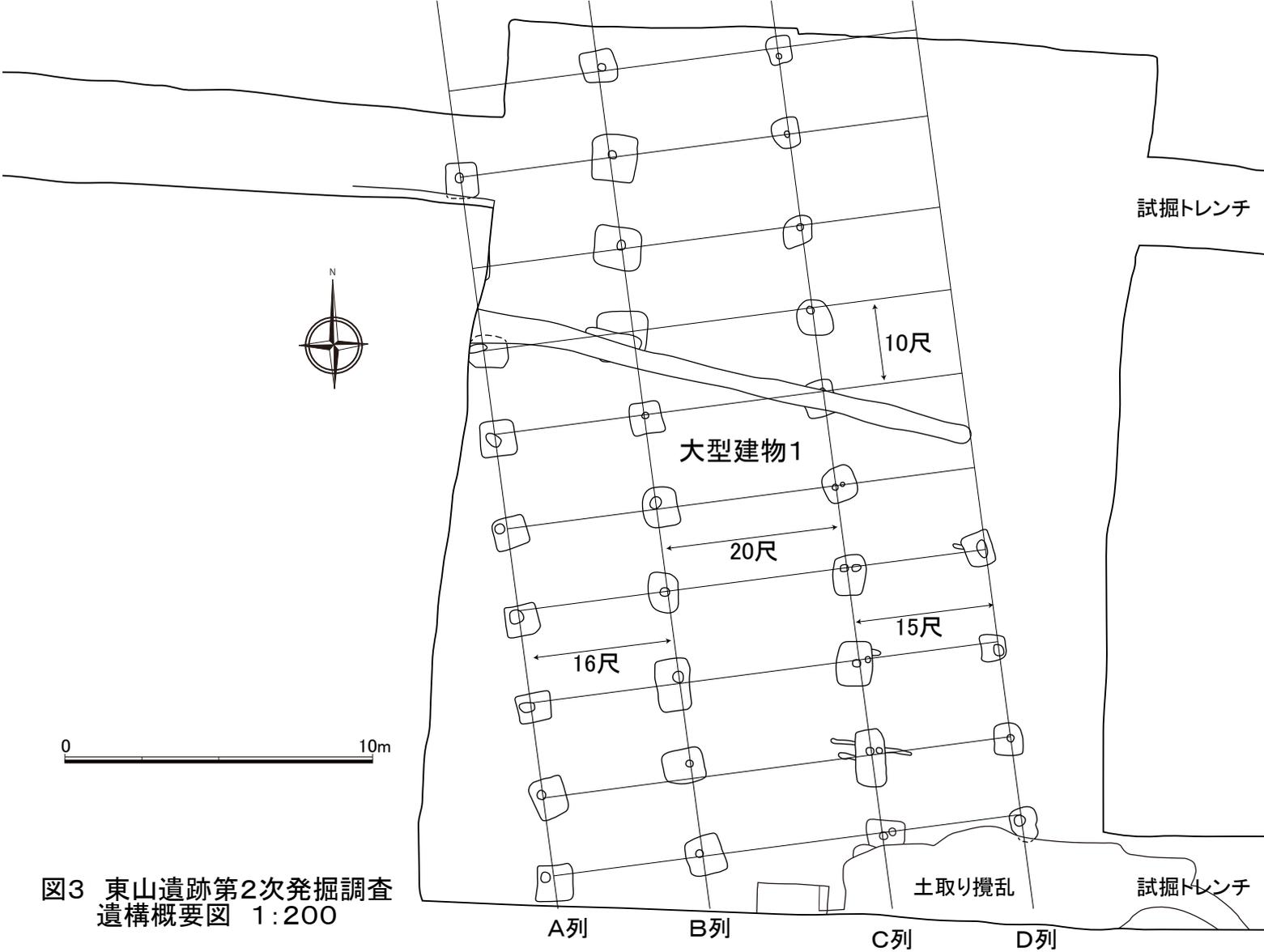


図3 東山遺跡第2次発掘調査遺構概要図 1:200

調査の概要

【大型建物1】

今回の調査で掘立柱の柱掘方を数多く見つけました。それらは整然と並んでおり、南北方向だけでなく、東西方向も柱筋が通ることから、1棟の建物を構成するものと考えられます。柱列は全部で4本（西からA・B・C・D列）あり、東西両側に廂がつく南北棟であったとみられます。調査区内で妻柱が確認できないことから、建物は南北へさらに延びると考えられ、桁行9間以上（約27m以上）×梁行4間（約15.2m）の規模となります。なお、遺構の方位は北で7.5度西へ振ります。

桁行の柱間は10尺（約3m）等間とみられますが、梁行は身舎と廂で柱間が異なります。身舎を構成するB・C列の間隔は20尺（約6m）であり、身舎は梁行も10尺等間となります。

一方、廂の柱列は、西側（A列）と東側（D列）で身舎との距離が異なります。西廂は身舎から16尺（約4.8m）、東廂は身舎から15尺（約4.5m）となります。

また、柱掘方は正方形に近いものや長方形になるものなどがありますが、一辺1m程度を標準とし、一辺1.3～1.4mとなるものもあります。身舎の柱掘方（B・C列）が廂の柱掘方（A・D列）よりやや大きい傾向があります。柱掘方内に黒色粘質土の柱痕跡が確認できるものが多く、その大きさから考えて、20～25cm程度と推定されます。また、掘方内に二つの柱痕跡が確認できるものがあり、断面確認を行った結果、二つの柱痕跡の深さが異なります。深い方が建物の主柱で、浅い方が床張りのための束柱と考えられます。この大型建物1は床張り構造であったと想定されます。

東廂（D列）の柱掘方は、南から3間分しか確認できません。もっとも北側の柱掘方の深さが10cm未満と非常に浅く、これより北側の柱掘方は削平されてしまった可能性とみられます。

まとめ

今回の調査で見つかった大型建物1は、桁行が100尺(約30m)以上、梁行が51尺(約15.3m)と非常に大型です。柱掘方も一辺1m程度か、それ以上の規模で、紫香楽宮の中枢部で発見されている建物群に匹敵します。しかし、出土遺物もなく、現段階で建物の性格を断定できません。ただし、今回の調査地は、周辺に紫香楽宮に関連する重要な遺跡が点在する中で、これまで調査が行われず、紫香楽宮関連の遺構の空白地帯となっていた場所です。その場所で宮殿中枢部に匹敵するような大型建物が確認されたという事実は、今後、紫香楽宮の全容を解明するために重要な資料となります。

今回の調査成果として、現段階で考えられる可能性として次の4点を挙げます。

① 今回の建物が離宮「紫香楽宮」の一部

今回発見された大型建物が南北棟であることから、コの字型に配置される建物群の一部である可能性が考えられます。このような建物の配置は宮殿^{かんが}や官衙^{わぎてん}の中心区画に採用されることが多く、今回見つかった建物は脇殿^{わきでん}と位置づけられます。離宮^{りきゆう}段階の「紫香楽宮」と天平16年(744)の後半ごろから文献史料に登場する、恭仁宮の造営停止後に首都として整備される「甲賀宮」^{こうかのみや}が別の場所にあったとする説もあります。

② 大仏体骨柱の立柱式に関連した臨時施設の一部

『続日本紀』^{しよくにほんぎ}天平16(744)11月13日条によると、大仏の芯柱^{しんばしら}になる体骨柱^{たいこちゆう}が立てられたとされます。体骨柱がどのようなものかについては議論のあるところですが、この体骨柱の立柱式^{りちゆうしき}に聖武天皇が参加し、自ら綱を引いて柱を立てたと記されています。天皇が儀式に参加するにあたっては、それ相応の施設が整備されたと考えられ、今回の調査で見つかった大型建物がその施設の一部である可能性が考えられます。

③ 大仏を造った役所「造甲賀寺所」の一部

『正倉院文書』^{しょうそういんもんじょ}などによると、寺院と大仏の工事を担当する役所として「造甲賀寺所」^{そうこうかてらしょ}が置かれます。「造甲賀寺所」の実態については不明ですが、寺院と大仏の工事を管理するための管理機能部門と作業にあたる工房部門が存在したと想定されます。今回の調査地の北東には鋳銅所跡があり、そこの関連性も考えられます。

④ 大仏造立の甲賀寺の一部の可能性

今回の調査地の南に位置する寺院跡は、甲賀寺の跡地を近江国分寺に再整備したものと考えられており、東大寺と同規模の大仏を造立するには現在確認できる伽藍^{がらん}では狭いことが指摘されています。今回の調査で見つかった建物は、掘立柱建物であるため、寺院の伽藍を構成する建物とは考えにくいですが、甲賀寺の寺域内に建てられた建物である可能性が想定できます。



西廂（A列）北から



東廂（D列）検出状況 南から